

## 「去國集」の成立とその意義

藤 田 一 乗

### 序

1920年、中国で最初の白話で書かれた詩集が出版された。それが『嘗試集』である。この詩集は発売から版を重ね、四版の出版の時にはすでに一万部を売ったベストセラーの詩集となり、多くの文学者にも多大な影響を与えた。

『嘗試集』は二つの詩集からできている。一つは白話で書かれた「嘗試集」、もう一つは文言で書かれた付録の「去國集」である。当時文壇の中心で文学革命を主張していた胡適が、白話詩を自ら作り出版することは、新文学を推進する上で大きな力になったのは間違いない。ではその重要な『嘗試集』の中に何故文言で書かれた「去國集」を付録で付ける必要があったのか。

この論文では、以下に「去國集」の成立とその意義を探っていきたい。

### 第一章 「去國集」の成立過程

『嘗試集』は1920年3月に亜東図書館から出版された。この詩集の作品の作成時期はバラバラであるが、大きく二つに区分されている。1916年以前の文言詩は「去國集」として、それ以後の白話詩は「嘗試集」としてまとめられている。

では、「去國集」の雛形はいつ頃にできたのであろうか。アメリカ留学中の生活はもとより、思想や哲学などを詳細に書き留めている『蕨暉室節記』（以下『節記』と略称）<sup>(1)</sup>によると、最初に「去國集」の言葉が出てくるのは、1916年7月30日〈一首白話詩引起的風波〉で、それには、

吾自此以後、不更作文言詩詞。吾之《去國集》、乃是吾絕筆的文言韻文也。

〔私はこれ以後、文言の詩詞を作ることはもはやない。私の「去國集」は、私の絶筆の文言の韻文である。〕

とあり、「去國集」を最後の文言作品を集めた詩集と宣言している。この時期の胡適は友人達との間で白話詩について激論を交わしていた真最中であり、これは文言詩に対する絶縁を誓ったものである。そしてこの時すでに「去國集」という詩集、それも文言詩を集めたものが何らかの形で胡適の手元にあったことを示している<sup>(2)</sup>。以下にこの「去國集」を詳しくみていくが、参考までに「嘗試集」にも少し触れておく。

「嘗試集」は、これも『筭記』によると1916年9月3日〈嘗試歌有序〉で言及している。これは後に「嘗試集」の中に〈嘗試篇〉として収められる代序であり、詩ではない。詩集としては、1916年9月16日〈改舊詩〉で、「(上記に詩が二首有り)第一首可入《嘗試集》,第二首但可入《去國集》。」とあり、「去國集」と同様、この時期すでに「嘗試集」という詩集があったことを示している。また、

一九一七年十月、適之拿這本嘗試集第一集給我看。

[1917年10月、適之が『嘗試集』第一集を持ってきて私に見せた。]

と『嘗試集』の錢玄同の序文<sup>(3)</sup>で言っていることから、1917年には帰国後に知り合った人間にも目を通してもらっていたことがわかる。

しかし1920年に出版された『嘗試集』と1916年に存在した「嘗試集」は大幅に違ったものであったであろう。何故なら出版された「嘗試集」の作品の多数は、1917年以後の作品で占められているからである。

## 第二章 「去國集」の作品

### 1. 初版と四版の異同

1920年3月に『嘗試集』は出版され、その後同年9月には早くも再版し、1922年10月に増訂四版が出版された<sup>(4)</sup>。その都度「去國集」は付録として巻末に収録されていた。しかしその内容は版毎に異なっていた。先ず初版と四版の「去國集」の作品の異同をみていく<sup>(5)</sup>。

最初に初版の「去國集」の作品を挙げると、

1〈去國行 二章〉、2〈翠樓吟〉、3〈水龍吟・綺色佳秋暮〉、4〈耶蘇誕節歌〉、5〈大雪放歌〉、6〈久雪後大風寒甚作歌〉、7〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉、8〈游影飛兒瀑泉山作〉、9〈自殺篇〉、10〈送許肇南先甲歸國〉、11〈墓門行〉、12〈滿庭芳〉、13〈水調歌頭 今別離 有序〉、14〈臨江

仙)、15〈將去綺色佳,叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉、16〈沁園春〉、17〈送梅覲莊往哈佛大學〉、18〈相思〉、19〈秋聲 有序〉、20〈秋柳〉、21〈沁園春 誓詩〉、以上計21作品である。

次に四版の「去國集」は、

4〈耶蘇誕節歌〉、5〈大雪放歌〉、6〈久雪後大風寒甚作歌〉、7〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉、9〈自殺篇〉、22〈老樹行〉、12〈滿庭芳〉、14〈臨江仙〉、15〈將去綺色佳,叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉、16〈沁園春〉、17〈送梅覲莊往哈佛大學〉、18〈相思〉、19〈秋聲 有序〉、20〈秋柳〉、21〈沁園春 誓詩〉。以上計15作品である。

この内、初版にあって四版にない詩は、1〈去國行 二章〉、2〈翠樓吟〉、3〈水龍吟・綺色佳秋暮〉、8〈游影飛兒瀑泉山作〉、10〈送許肇南先甲歸國〉、11〈墓門行〉、13〈水調歌頭 今別離 有序〉の計7作品。

四版にあって初版にないものは、22〈老樹行〉の1作品のみである。

これからわかるように初版から四版になると、「去國集」の詩はかなり減少している。四版では初版にあった詩が7首も削られたのは何故であろうか。まず胡適自身の第四版自序から出版された状況をみると、

現在新詩的討論時期,漸漸的過去了。

[今は新詩の討論する時期が、徐々に過ぎ去って行った。]

初版が出版された時期のように新詩を討論する時期は過ぎ去り、現在は、

新詩的作者也漸漸的加多了。

[新詩の作者も徐々に増えていっている。]

新詩を作る人間が増加している時期であるとした。これは1922年には世の中に新詩は少しずつではあるが受け入れられたとの認識であった。そしてこの運動の進展具合を纏足を外した女性に喩え、「但是纏過脚的婦人永遠不能恢復他的天然腳了。我現在把我這五六年的放腳鞋樣,重新挑選了一遍,刪去了許多太不成樣子的或可以害人的」と、この5、6年の作品を選び直し、多くの詩詞としての体を成さないものや、人を傷つけるものは削除の対象となった。この削除の方針は「去國集」の作品にも及び、大幅な改訂が行われたと考えられる。

続けて「去國集」の序を見ていこう。これは版を問わず同じ文である。

それは、

胡適既已自誓將致力於其所謂『活文學』者、乃刪定其六年以來所爲文言之詩詞、寫而存之、遂成此集。名之曰去國、斷自庚戌也。(中略)集中詩詞、一以年月編纂、欲稍存文字進退、及思想變遷之迹焉爾。

[胡適は既に自ら所謂『活文学』に尽力することを誓い、この六年以来の文言で書いた詩詞を削除し、書いて残っているものを、この詩集として編纂した。これを名づけて去國といい、庚戌(1910年、筆者注)以後のものを集めた。(中略)集の中の詩詞は、年月で編纂してあるが、文学の進退、思想變遷の跡を些か留めたいがためである。]

この「去國集」は、アメリカ留学期の胡適の文学に対する理解の度合いと思想變遷の跡を読者に示したものであり、それを通して読者は文言詩から白話詩への移行を知ることができる。

その變遷を示すにあたり、新詩が世の中に受け入れられつつあった1922年には、〈去國行 二章〉、〈翠樓吟〉、〈水龍吟・綺色佳秋暮〉、〈游影飛兒瀑泉山作〉、〈送許肇南先甲歸國〉、〈墓門行〉、〈水調歌頭 今別離 有序〉の一部は、文学に対する理解の度合いと思想變遷の跡を示すのに役に立たなくなったことも削除の理由の一つであろう。如何に文言詩を集めた「去國集」であっても、収録されている詩詞は、単なる文言詩ではなく、胡適の思想の進化が現れている、いわば古典詩から新詩への過程の詩が「去國集」には集められているのである。

それでは四版で削られた詩とはどのようなものだったのか。少し触れておく。

1〈去國行 二章〉、2〈翠樓吟〉、3〈水龍吟・綺色佳秋暮〉の作品はそれぞれ1910年、1910年、1912年に作られた作品で、胡適の留学初期の作品である。また『筭記』には〈水龍吟・綺色佳秋暮〉が1912年11月6日〈水龍吟送秋〉とある以外、残りの二首は記述がない。

その内容は、〈去國行 二章〉は五言二十四句、二章からなる詩で、祖国を去りアメリカに留学に行くその心情を船の上で吐露した作品である。その最初の箇所を見てみると、

木葉去故枝、遊子將遠離。故人與昆弟、送我江之湄。執手一爲別、慘愴不能辭。

[木の葉、故枝より去り／遊子將に遠離せんとす／故人と昆弟／我を  
江の湄に送る／手を執り一たび別れを爲すも／慘愴として、辭する  
こと能わず]

友人や兄弟との別れを惜しんでいる。この時実際に兄の胡紹之が見送りに行っているのも、或は彼に送った送別の詩かもしれない。

〈翠樓吟〉は詞牌が付いていることからわかるように詞である。胡適は詩だけでなく詞も多数作っていた。これはその中でも初期に作られた作品である。その内容はアメリカのイサカに着いた胡適がその周辺の山に行き、風景と故郷への想いを詠んだ作品である。その描写は、

霜染寒林、風摧敗葉、天涯第一重九。登臨山徑曲、聽萬壑松濤驚吼。

[霜、寒林を染め／風、敗葉を摧し／天涯第一の重九／登臨し山徑曲り／萬壑松濤の驚吼を聴く]

と始まり、後半では自分を旅人に準えて郷愁の思いを詠んでいる。これは胡適がアメリカについて早々の作品であり、20歳の青年の正直な気持ちさが詠まれている。

〈水龍吟・綺色佳秋暮〉も詞牌の名前が付いていることから、詞であるのが分かる。この内容は副題からわかるようにイサカの秋の風景を詠んだ作品である。その最初の部分は、

無邊橡紫榆黃、更青青映松無數。平生每道、一年佳景、莫如秋暮。

[邊なく、橡は紫；榆は黄／更に青青として松を映すこと無數／平生毎に道う／一年の佳景／秋暮に如くは莫しと]

とあり、秋の一コマを詠んでいる。

上記の三作品はいずれも内容的にはそんなに優れたものではなく、題材といい、形式といい、その後見られるような実験的なものはない。それらはアメリカに留学に行つて間もない頃の作品であり、自分が留学するにあたって経験した別れや、新天地の環境を詠んだに過ぎない。その後見られるような題材や用語等形式的な面での目新しさはなく、従来の伝統的な詩の作品群だと言えよう。

8〈游影飛兒瀑泉山作〉は、「去國集」では三年五月十三日とあり、『筭記』には1914年6月12日〈遊英菲兒瀑泉山三十八韻〉とあり、「去國集」にはない序と追記がある。『筭記』は五言百四句から成り、「去國集」では五言六

十四句から成っており、半分近く削られている。

内容は「春深百卉發，羈人思故園，良友知我懷，約我遊名山。」と始まり、エンフィールドの滝へピクニックに行ったことを詠んである。さらにこの序の最後に、王介甫の『褒禪山記』に似ている記述があるが、新しい試み等は見当たらない。しかし『筭記』の方には重要な追記があり、それはまた後に触れる。

10〈送許肇南先甲歸國〉は「去國集」では三年八月十四日とあり、『筭記』でも同日に〈送許肇南歸國〉とある。「去國集」では詩のみであるが、『筭記』には短く許肇南の帰国に際し、この詩を作ったと述べてある。詩自体は、「秋風八月送殘暑，天末忽逢故人許。烹茶斗室集吾侶，高談奕奕忘夜午。」と始まる送別の詩である。

11〈墓門行〉は「去國集」では四年四月十二日とあり、『筭記』でも同日に同題である。英語の詩を中国語に訳した詞であり、両方に原文も記載されている。また「去國集」の序文の方が詳しくなっている。

内容は原文の詩の形式（三段落からなり、段落の間には一行あけている）を忠実に写し、中国語訳も三段落から成る。この段落分けは胡適の一つの実験であるが、これの前に掲載されている詩にもその実験がすでに試みられ、訳詩も〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉があり、この〈墓門行〉独自の実験はない。

13〈水調歌頭 今別離 有序〉は「去國集」では四年八月三日とあり、『筭記』でも同日に〈水調歌頭〉〈今別離〉とある。これも〈墓門行〉等と同様、胡適が自分で書いた英語の詩を中国語に訳した詞であり、前段、後段の二段から成っている。しかしここでも独自の実験的なものはない。

それでは、なぜこれらの詩が四版では削除されたのであろうか。それは容易に答えが見出せないが、一つには、単にその当時感じたことを詩にただけであったり、またその詩で示した実験的な意味合いが薄れてしまっている、或はその試みが「去國集」内で重複してしまっているからではないか。四版が出版された1922年では、もはや胡適の思想過程の出発点である古典詩や、実験的な意味合いの薄いものを読者に示しても、すでに新詩の洗礼を受けた読者にはもはや何の役にも立たない、それ故に削除されたのではないか。

二つ目には、恐らくそれには周りの人間の助言もあったであろう。四版の自序には、

刪詩的事、起于民國九年的年底。當時我自己刪了一遍、把刪牘的本子、送給任叔永陳莎菲、請他們再刪一遍。後來又送給『魯迅』先生刪一遍。〔詩を削除することは、民国九年の末に始まった。当時私は自分で一度削除し、削除し残った本を、任叔永、陳莎菲に送って、彼らにもう一度削除を頼んだ。その後『魯迅』先生にも送り、削除してもらった。〕

任叔永、陳莎菲、魯迅はもちろん、さらに俞平伯にも添削を頼んでいる。実際に魯迅、俞平伯は「嘗試集」の〈江上〉、さらに魯迅は〈礼〉を削除することを勧めている<sup>(6)</sup>。おそらく「去國集」の作品も彼等の添削にあったであろう。これも削除の理由の一つと考えられる。

それでは、削除されず残った詩詞は、如何なる意図で「去國集」として編纂されたのか。それを以下で検討していく。

先に「去國集」の自序を見たが、それには胡適がアメリカに留学していた間に書いた文言の詩詞を残し、それを詩集としてまとめ、「去國」と名づけた。活文学を提唱する自分が文言の詩詞を残す理由は、「集の詩詞は年月で編纂し、ただ文字の進退及び思想の変遷を少し留めておきたいだけである」と述べてあった。そして作品はほぼ作成年通りに収録されている。しかし文学の進退と思想の変遷とは具体的に何を意味するのか。それを明らかにするには「去國集」だけではなく、『筭記』と対照してよりその意図が明らかになっていく。そこで以下に主要と思われる詩を「去國集」と『筭記』を照らし合わせて検討していく。

## 2. 作品内容

### a. 〈耶蘇誕節歌〉〈大雪放歌〉

〈耶蘇誕節歌〉は「去國集」では二年十二月二十六日とあり、『筭記』でも同日に〈耶蘇誕日詩〉とある。「去國集」〈耶蘇誕節歌〉の一部分を挙げると、

冬青樹上明纖炬，冬青樹下謹兒女，高歌頌神歌且舞。朝來阿母含笑語：  
『兒輩馴好神佑汝。竈前懸襪青絲縷。竈突神下今夜午，朱衣高冠鬚眉

古。神之來下不可觀,早睡慎毋干神怒。』

〔冬青樹上、織炬明らし／冬青樹下、兒女謹し／高歌し神を頌え、歌い且つ舞う／朝來りて、阿母笑いを含んで語る：／『兒輩馴好なれば、神汝を佑く／竈前、襪を懸く、青絲の縷／竈突より神下る、今夜の午／朱衣高冠にして鬚眉古く／神の來り下る、觀る可からず／早睡し、慎しんで神怒を干すなかれ』と〕

異国で目の当たりにしたクリスマスという中国にはない習慣を詠んだ詩である。この詩は若干の本文の異同はあるが、大きな違いは自注があるかないかであろう。『筭記』には、「織炬」は「廿四日爲聖誕夕,家家庭中供柏一巨枝,飾以綵線,枝上遍燃小燭無數,名聖誕節樹」と、「竈突神」は「神自突」となっており、「煙囪」と、引用していないが、後半部分の「夜來一神所予」は「俗懸小兒女襪於竈前,謂有神名聖大克羅者,將自竈突下,以食物玩具置襪中,蓋父母爲之也」と、「天下主」は「耶教徒稱耶蘇爲上帝之子」と、それぞれ自注がある。何故自注を削除したのか、紙面の都合で削除したのか、胡適が珍しい風俗と感じ、この注をつけたが、1920年当時にはすでにクリスマスという習慣が一般に知られていたのか、それとも一般読者が対象ではなく、始めから欧米の習慣を熟知しているインテリ層に向けて発信するつもりであり、このような注は必要ではないと考えたからであろうか、疑問は残る。しかし文化の違いを読者に伝えることを目的の一つとしたのは間違いなく、このように細かく記述していることから、胡適自身相当クリスマスの印象が深く残ったのであろう。これはそれまでには考えられないようなアメリカの習慣を題材として詩に用いており、一つの実験である。

アメリカの生活の一コマを描いたものでは、〈大雪放歌〉もこの部類に入る。

この詩は「去國集」では二年十二月、『筭記』では1914年1月23日〈『大雪放歌』和叔永〉とあり、〈耶蘇誕節歌〉と同じ頃に作られた詩である。詩そのものは、「去國集」『筭記』共あまり変りがない。これは任叔永との約束で、任が四首の詩を作るとに胡適が一首作るとの約束で、作成した詩である<sup>(7)</sup>。その内容はクリスマスに降った初雪から始まり、その雪、外の景色の描写、そしてコートを羽織った老農夫がソリに乗って市場にい



く。その道すがら知り合いに会い、言葉を交わす。道にははしゃいでいる女の子が、スティックとスケート靴を手にもっていること等が描写されており、アメリカでの冬の光景の一コマを詠んだものである。「去國集」の詩の後半では、

路旁謹呼小兒女、冰槳鐵屐手提挈。昨夜零下二十度、湖面凍合堅可滑。  
客子踏雪來復去、朔風齧膚手皸裂。

[路旁謹呼す、小兒女／冰槳、鐵屐、手ずから提挈す／昨夜零下二十度／湖面凍合し、堅にして滑る可し／客子、雪を踏み、來りて復た去り／朔風、膚を齧み、手皸裂す]

とあり、『筈記』では「冰槳」の後に「hockey stick」、「鐵屐」は「踏冰所用」と注釈まで付けて、〈耶蘇誕節歌〉と同様、中国にはない風俗や物を書いている。

b. 〈久雪後大風寒甚作歌〉

これは「去國集」では三年正月とあり、『筈記』では1914年1月29日に同題である。「去國集」〈久雪後大風寒甚作歌〉の前半部分を挙げると、

夢中石屋壁欲揺、夢回窗外風

怒號、澎湃若擁萬頃濤。

侵晨出門凍欲僵、冰風挾雪捲

地狂、齧肌削面不可當。

與風寸步相撐支、呼吸梗絕氣

力微、漫漫雪霧行徑迷。

[夢中の石室、壁揺れんと欲し／夢より回り、窗外、風怒號し、澎湃たること、萬頃の濤を擁くが若し／侵晨門を出で、凍え僵れんと欲し／冰風、雪を挟み、地を捲き狂い／肌を齧み面を削りて當る可からず／風と寸歩し相撐支し、呼吸梗絶し、氣力微かなり／漫漫たる雪霧、行徑に迷う]

とある。詩は数カ所異同があるが、意味が大きく変わる程ではない。内容は嚴冬の様子を描いた作品である。ここでの注目すべき箇所は、詩の書き方である。

一見して分かるように三句で一まとまりになっている。この試みは『嘗

試集』自序の中でも言及している。

「去國集」裏的「耶蘇誕節歌」和「久雪後大風寒甚作歌」都帶有試驗意味。後來做「自殺篇」，完全用分段作法，試驗的態度更顯明了。

「[去國集]の〈耶蘇誕節歌〉と〈久雪後大風寒甚作歌〉はいずれも試験の意味がある。後に〈自殺篇〉を作り、それは完全に段落分けを使用しており、試験の態度が更に明確になっている。]

段落分けという今ではありふれた形式さえも、この当時では改革の一つであり、胡適は形式の改良に手をつけたことがわかる。

ところで、このまとまりの意味は「去國集」を見ているだけでは段落を分けているだけに見える。だがもう少し違った意味合いもある。それは『筭記』を見ればわかる。

『筭記』の詩の追記には、以下のような文がある。

此詩用三句轉韻體，乃西文詩中常見之格，在吾國詩中，自謂此爲創見矣。

[この詩では三句轉韻体を使用しており、西洋の詩ではよく見られる型であるが、吾が国の詩では、これが初めてであろう。]

三句轉韻体という新たな詩形を用いたと述べている。この三句轉韻体のことは『筭記』で度々触れており、例えば1914年5月31日〈山谷之三句轉韻体詩〉、1915年2月11日〈三句轉韻体〉<sup>(8)</sup>や四版の「去國集」に掲載されている〈老樹行〉の自跋にも全く同じように「此詩用三句轉韻體」との言及箇所がある。

この西洋詩の特徴の一つであると胡適が認識していた詩体を「去國集」に収録しているのは、アメリカ留学時代の文学思想の変遷で重要な部分を占めていると考えていたからであろう。

### c.〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉

訳詩、訳詞を胡適は度々書いているが、この作品は最も早い作品であり、その字数も最も多い。これは「去國集」では五年五月十一夜とあり、『筭記』では1914年2月3日〈裴倫『哀希臘歌』〉とある。これはバイロンの『ドン・ジュアン』の一節を中国訳したものあり、その構成は、16の節から成り、若干の異同はあるが、詩そのものは「去國集」『筭記』に大差はない。

また「去國集」は序文、原文と注釈があり、『筭記』には序文と追記があるが、原文は載せていない。

大きく異なる点は序文と追記であろう。『筭記』の序文は「去國集」のとは比べ短く、今までこの作品を訳した中国人を挙げその欠点に触れているだけだが、「去國集」では作者であるパイロンの略歴とその文学史上の位置、『ドン・ジュアン』の内容など細かく記してある。出版するに際し、当時あまり知られていなかったパイロンと作品内容等を読者に示す必要があったのかもしれない。

今具体的に異なっている箇所を以下に挙げる。『筭記』の序文では今まで訳した三人―梁啓超、馬君武、蘇曼殊―を挙げ批評する。

茲三本者、梁譯僅全詩十六章之二；君武所譯多訛誤，有全章盡失原意者；曼殊所譯，似大謬之處尚少。而兩家於詩中故實似皆不甚曉，故詞旨幽晦，讀者不能瞭然。

[この三冊で、梁の訳は全詩十六章の内二章しか訳していない；君武の訳した箇所は、誤謬が多く、全章悉く原意を失っている；曼殊の訳した箇所は、大きな誤謬は少ないようである。しかし二人は詩中の故事について理解していないようで、その言葉の意味はわかり難く、読者ははっきりと理解できない。]

梁啓超は十六分の二しか訳出していない。馬君武の訳は誤りが多く、蘇曼殊は大きな誤りが少ない、しかしこの二人は故事に詳しくないので、その言葉ははっきりとせず、読者は判然としない。そこで門外漢であるが私が訳してみようと続くのである。では「去國集」の序はどうであるか見てみると、

此詩之入漢文，始於梁任公之『新中國未來記』小説。惟任公僅譯一三兩章。其後馬君武譯其全文，刊於『新文學』中。後蘇曼殊復以五言古詩譯之。民國二年，吾友張耘來美州留學，攜有馬蘇兩家譯本。余因得盡讀之。頗嫌君武失之訛，而曼殊失之晦。訛則失真，晦則不達，均非善譯者也。

[この詩が中国の文章になったのは、梁任公の『新中国未来記』の小説が始めてである。ただ任公は第一、第三の二章訳しただけである。その後、馬君武がその全文を訳し、『新文学』に載せた。その後、蘇曼殊

も五言古詩でこれを訳した<sup>(9)</sup>。民国二年、友人の張耘がアメリカに留学に来て、馬、蘇二人の訳本を携えていた。私はこれを悉く読むことができた。そして私は君武が虚偽を犯し、曼殊が晦渋さを犯していることに不満であった。虚偽を行えば真を失い、晦渋さは達せず、両者は良訳ではない。]

この文章が上記の『筭記』の序の箇所にあたるが、内容がより具体的になっている。馬君武の虚偽と蘇曼殊の晦渋、そしてその虚偽は真を失い、晦渋さであるから達しない、その両方とも良訳ではないと、『筭記』では「故事に詳しくないから判然となる」と述べていた意見を修正した。

しかしこれだけでは「失真」「不達」の意味合いが今ひとつはっきりしないが、この「失真」「不達」は『筭記』では何度か出てくる論題の一つである。その最初は先ほど触れた、『筭記』の〈遊英菲兒瀑泉山三十八韻〉に出てくる。その追記には、

久不作如許長詩矣。此詩雖不佳，然尚不失真。嘗謂寫景詩最忌失真。老杜「石龕詩」「羆熊咆我東，虎豹號我西，我後鬼長嘯，我前猿又啼」。正犯此病。

[長い間こんな長い詩を作っていなかった。この詩は良くはないが、しかし真は失っていない。嘗て写景詩は最も真を失うことを嫌うと言った。杜甫の「石龕詩」の「羆熊、我が東に咆え、虎豹、我が西に號ぶ、我が後には鬼長く嘯き、我が前には猿又た啼く」。これはこの欠点を犯している]

〈遊英菲兒瀑泉山三十八韻〉はそんなに優れた詩ではないが、真は失ってはいないとして、杜甫の「石龕詩」を引き合いに出し、それを批判する。ここでは真を失うとは、有りもしないことを詠む、つまり写實的ではないという意味である。この〈遊英菲兒瀑泉山三十八韻〉も写実に力点を置いた作品であり、眼前の風景をそのまま描き、また外国の作品をその筆法を中国語に訳すことに心を砕いていた。

また1915年2月11日には〈詩貴有真〉では、友人の至言として、「詩貴有真，而真必由於經驗」を挙げている。目の前にあることを写實的に書くだけでなく、經驗に基づいて書くことも真であると述べた。

次に「不達」の意味を考えてみる。これは後で改めて触れるが、『筭記』1

914年7月7日〈自殺篇〉の追記にこうある。

此詩全篇作極自然之語、自謂頗能達意。吾國詩每不重言外之意、故說理之作極少。

[この詩は全篇極めて自然な言葉で作っており、頗る意味が通じているといえる。吾国の詩は常に言外の意を重視せず、理を説く作品は極めて少ない。]

〈自殺篇〉は自然な言葉で、意味がよく相手に伝わる作品と述べた。つまり「不達」は意味の通らないことを示している。そしてこの「真」で「達意」なるものが白話であると後に胡適は論を進める。例えば1916年7月6日〈白話文言優劣比較〉の中にも、「白話不但不鄙俗、而且甚優美適用。凡言語要以達意為主、其不能達意者、則為不美。」とあり、意味が通じないものは排除していく姿勢が見受けられる。

この〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉では詩詞を作る時だけではなく、訳詩・訳詞の場合でも「真」「達」を重視していたことがわかる。そしてこの「真」「達」を重視したことが、後にわかりやすい「白話」に着目させる一つのきっかけでもあった。そして言うまでもないが、このような長い訳詩も文学上の大きな実験であった。

#### d. 〈自殺篇〉

これは「去國集」では三年七月七日とあり、『筭記』でも同日に同題である。「去國集」では序文と五言四十六句から成り大きく五つの章に分かれている。『筭記』では序文と追記、五言五十二句から成り、これも大きく五つの章に分かれている。「去國集」〈自殺篇〉の一部を挙げると、

叔永至性人、能作至性語。脊令

雨聲、使我心愁苦。

我不識賢季、焉能和君詩？頗有

傷心語、試爲君陳之。

[叔永、至性の人／能く至性の語を作す／脊令、風雨の声／我心をして愁苦せしむ／我、賢季を識らず／焉くんぞ能く君の詩と和せんや／頗る傷心の語有り／試みに君が為に之を陳ぶ]

〈久雪後大風寒甚作歌〉と同じように段落に分けて書いてある。〈久雪後

大風寒甚作歌)では改韻の度に段落を変えていたが、今度は意味内容の切れ目で段落を変えている。

今までの詩でも、段落分け、句読点、かぎカッコ等が見られた。それは西洋の影響であるといえるが、胡適自身は、『筭記』の追記で、

吾近來作詩，頗能不依人蹊徑，亦不專學一家，命意固無從模倣，即字句形式亦不爲古人成法所拘，蓋胸襟魄力，較前闊大，頗能獨立矣。

[私は近頃詩を作る時は、人のやり方の頼らず、また専ら一家を学ぶこともなく、主題は当然模倣に依ったりせず、字句形式も古人のやり方の拘らず、胸中気力に満ち、以前より広大であり、独立することができた。]

詩を作るにあたっては、他人のやり方は模倣しない。また字句や形式の古人の法則には拘らず、自分でやってのけると述べる。古人の影響から脱する為に西洋の文章形式の導入を試みたのであろう。

そして〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉で述べたように、「達意」に関する記述が載っている。〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉共々、自分の作品を自然な言葉、よく意味が通じると自認している。そしてその作品中国では少ないが道理を説く作品としている。

#### e.〈老樹行〉

これは今までとは異なり、四版になって初めて掲載された詩である。『筭記』には1915年4月26日に同題である。その詩は共に詩と追記がある。「去國集」〈老樹行〉の前半部は、

道旁老樹吾所思，  
軀幹十抱龍髯枝，  
藹然俛視長林阜。  
冬風挾雪捲地起，  
撼樹兀兀不可止，  
行人疾走敢仰視？

[道旁老樹、吾思う所／軀幹十抱、龍髯の枝／藹然として、長林の卑を俛視す／冬風、雪を挾み、地を捲いて起こり／樹を撼かすこと兀兀として、止まる可からず／行人疾走し、敢えて仰視せんや？]

とある。これは『筭記』の自跋に「此詩用三句轉韻體」と書いてあるように、〈久雪後大風寒甚作歌〉等と同じ類の作品である。

では、何故同じような作品がある中、この詩が四版になって初めて収録されたのか。その答えが跋文にある。それには、

這首詩是民國四年四月二十六日作的。那時正當中日交涉的時期，我的『非攻主義』狠受大家的攻擊，故我作了這首詩，略帶解嘲之意。這首詩後來又惹起了許多朋友的嘲笑。（中略）他們都戲學『胡適之體』，用作笑柄。其實這首詩在去國集裏，要算一首好詩，不知我當初何以把他忘了。〔この詩は民國四年四月二十六日に作った。その時はちょうど中日交渉の時期で有り、私の『非攻主義』は皆からの攻撃を受け、それ故私はこの詩を作り、少し解嘲の意味を帯びさせた。この詩はその後また多くの友人の嘲笑を引き起こした。（中略）彼らは皆『胡適之體』を戯れて学び、笑いの種とした。この詩は「去國集」において、やはり良い詩であり、何故だか私は当初それを忘れていた。〕

日本から二十一カ条の要求を突きつけられた中国に対して、胡適は「非攻主義」を主張したが、勿論受け入れられるはずも無かった。そこで自分の心情を戯れに述べたのがこの詩であった。しかもこの詩は「胡適之體」として友人に嘲笑でもって受けとめられるに至った。

では初版では採用されなかったのに、四版になってわざわざ跋をつけて収録したのは何故か。それはこの「胡適之體」を伝えたかったからではないか。この「胡適之體」という言葉は『筭記』や「去國集」には見られない。しかし1936年2月21日に『自由評論』で「談談“胡適之體”的詩」という評論がある。これによると、「胡適之體」は以下の3つのことを満たさないとはいけない。

第一，說話要明白清楚。（中略）至少“胡適之體”的第一条戒律是要人看得懂。

第二，用材料要有剪裁。消極的說，這就是要刪除一切浮詞湊句；積極的說，這就是要抓住最扼要最精彩的材料，用最簡煉的字句表現出來。

第三，意境要平實。

〔第一、話は明白ではっきりしていなければならない。（中略）少なくとも“胡適之體”の第一規則は、人が見て理解できなければならない

ことである。

第二、材料を用いる際には取捨選択しなければならない。消極的にいえば、これは一切の空虚な詞や寄せ集めの句を削除しなければならない。積極的にいえば、これは最も肝心な、最も素晴らしい材料を掴み、最も簡潔な字句で表現しなければならない。

第三、情趣が質朴でなければならない。]

聞いてわかること、材料の取捨選択、情趣の質朴さ、これが「胡適之体」であった。

1922年の四版にわざわざこれを収録したのは、やはり聞いてわかること、材料の取捨選択、境地の質朴さを世に推し進めようとしたのだろう。その一つの具体例としてこの〈老樹行〉を挙げたのであろう。

#### f. 〈臨江仙〉

これは「去國集」では四年八月二十四日とあり、『筭記』では1915年8月20日に同題である。詞の内容もまったく同じであるが、「去國集」では詞があるだけだが、『筭記』の方は序がある

その『筭記』の序には目を引く表現がある。それは、

今之言詩界革命者、矯枉過正、強爲壯語、虚而無當、則妄言而已矣。

[現在、詩界革命を唱える人間は、欠点を直そうと度が過ぎ、努めて壯語を爲し、虚にして当らずで、妄言にすぎない。]

今詩界革命を叫ぶ者も徒に壯語をなすが、それは妄言であると述べている。

ここで『筭記』に始めて「詩界革命」と言う単語が出てくる。これはこの後友人達との間で大論争を引き起こすテーマになっていく。この頃胡適は「如何可使吾國文言易於教授」という論文を書いており、中国文学に対する改良の必要性を感じ始めていた。

〈臨江仙〉は胡適のアメリカ留学中で最も激しく論じられることとなる「詩界革命」に言及した初めての詩であり、それ故に「去國集」に収録されたのである。

前述したように、この詞は『筭記』を見ないと、その詞の持っている本来の意味を理解することはできない。しかしこの真意を理解できた者は



存在したのである。何故なら『筭記』は一部の友人達には公開にされていたからである。(このことは後に触れる)

g.〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉〈沁園春〉

〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉は「去國集」では四年八月二十九日とあり、『筭記』でも同日に〈將去綺色佳留別叔永〉とある。〈沁園春〉は「去國集」では四年九月二日とあり、『筭記』でも同日に「沁園春」別杏佛とある。

この二つの詩はともに送別の詩であり、前者は任叔永、後者は楊杏佛に送った詩詞である。この頃になると難解な言葉は影を潜め、平易な言葉や外国語も自然に使用し始めている。

例えば〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉の最初の四句、

橫濱港外舟待発、徜徉我方坐斗室、檸檬杯空菸捲殘、忽人面過眼瞥。

〔横濱港外、舟発するを待ち／徜徉し、我方に斗室に座し／檸檬杯空け、菸捲残り／忽然として人面、過ぎ眼瞥す。〕

これには詩語などなく、使用されている文字も平易で、「檸檬杯」という古典詩では有り得ない言葉を使い、〈沁園春〉でも、

願乗風役電、戡天縮地、頗思瓦特、不羨公輪。

〔願うらくは風に乗り、電を役し／天に戡ち、地を縮め／頗る瓦特を思い／公輪を羨まず〕

科学者のジェームス・ワットのことを挙げ、「瓦特JamseWatt,即發明汽機者」と自注までつけ、外国の名詞を使用して、詩詞を作り出している。そしてこれ以後の詩詞では、度々それを意図的に用いるようになる。

h.〈送梅觀莊往哈佛大學〉

これは「去國集」では四年九月十七日とあり、『筭記』でも同日に〈送梅觀莊往哈佛大學詩〉とある。「去國集」では詩とその注記があり、『筭記』は、詩と自跋がある。詩は三つの段落から構成され、「去國集」「筭記」には多少の異同があるが、内容そのものが変わる程ではない。

ではこの詩で目を引く箇所はどこか。それは「去國集」の注、『筭記』の

自跋である。『筭記』自跋には、

此詩凡三轉韻，其實有五轉。

[この詩は三転韻のようであるが、実は五転している。]

ここでも韻のことについて言及しているが、これまでとは違い五回韻を変えていると述べている。その後具体的にその換韻箇所を述べる。もちろんこれは上記で何度か触れた三句転韻体の発展形と言えるが、この後『筭記』にはこのような韻については語られていない。言わば韻についての最後の実験といえる。

次に両方の自跋、注で言及していることがある。それは外国語、ここでは英語を取り入れることである。『筭記』の自跋では

此詩凡用十一外國字：一爲抽象名，十爲本名。人或以爲病。其實此種詩不過是文學史上一種實地試驗。

[この詩は十一の外国語を使用している。一つは抽象名詞であり、十個は固有名詞である。有る人はこれを欠点とするであろう。しかしこのような詩は文学史上の实地試験に過ぎない]

この試みを文学史上の实地実験と述べ、「去國集」では更に詳しく、

此詩凡用外國字十一：牛敦Newton英國科學者。客兒文Kelvin英國近代科學大家。愛迭孫Edison美國發明家。拿破崙Napoleon。倍根Bacon英國哲學家，主戡天之說，又創歸納名學，爲科學先導。蕭士比Shakespeare英國文學鉅子。舊譯莎士比亞。康可Concord地名，去哈佛不遠，十九世紀中葉此邦文人所聚也。愛謀生Emerson，霍桑Hawthorne，索虜Thoreau，以上三人，美國文人，亦哲學家；墓皆在康可。『烟士披里純』Inspiration直譯有『神來』之意。梁任公以音譯之，又爲文論之，見飲冰室自由書。

[この詩は十一の外国語を使用している。：ニュートンは英国の科学者である。カルピンは英国近代の科学の大家である。エジソンは米国の発明家である。ナポレオン。ベーコンは英国の哲学者であり、自然を支配する説を唱え、帰納法を創り、科学の先鞭となった。シェークスピアは英国文学の大物。以前は莎士比亞と訳していた。コンコルドは地名。ハーバードから遠くなく、19世紀中頃ここは文人の集まる所であった。エマーソン、ホーソー、ソロー、以上の三人は米

国の文人であり、哲学者でもある；墓は皆コンコルドにある。『インスピレーション』は直訳では『神来』である。梁任公が音でもって訳し、さらに文章で論じた、『飲冰室自由書』を見よ<sup>(10)</sup>。]

ニュートン、ベーコン等の人物名、コンコルドという地名、更にはインスピレーション、これら多量の外国語を意図的に使うことを文学史上の実地実験とし、新たな詩の局面を開こうとした。前述した〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別。〉〈沁園春〉も確かに外国人の名前を使って詩詞を作っていたが、これほど多量にしかも意図的に使っているのは初めてである。

さらに詩の内容でも注目すべき事柄がある。それは「文学革命」について触れている箇所があり、「去國集」〈送梅觀莊往哈佛大學〉の第二段落に、

梅君梅君毋自鄙。神州文學久枯餒，百年未有健者起。新潮之來不可止，文學革命其時矣。吾輩勢不容座視，且復號召二三子，鞭笞驅除一車鬼，再拜迎入新世紀。

[梅君梅君自ら鄙しむなかれ／神州文學久しく枯餒し／百年未だ健なる者起きること有らず／新潮の来ること止める可からず／文學革命その時や／吾輩の勢、座視すること容れず／且つ復た、二三子を號召し／鞭笞、一車鬼を驅除し／再拜し新世紀を迎入す]

と、「文学革命」の言葉が見える。そもそもこの詩は友人・梅觀莊に宛てた戯歌なのだが、この頃から胡適は文学革命について考え始めていたようである。もちろん文学をどこから革命するのか、またその手段など具体的なことははっきりとはしていない。これが本格的論争に発展するのは1916年に入ってから展開する<sup>(11)</sup>。しかし初めて「文学革命」の口火を切った記念すべき作品なのである。

#### i. 〈沁園春 誓詩〉

これは「去國集」では五年四月十二日とあり、『筭記』では1916年4月13日〈沁園春 誓詩（四月十三日初稿）〉にある。この作品は題名から初稿とあることから分かるように改稿を重ねて、最終的には五回改稿しているが、「去國集」の記載されているのは、初稿のものである。以下に「去國集」

〈沁園春 誓詩〉を挙げる。

更不傷春,更不悲秋,以此誓詩。任花開也好,花飛也好,月圓固好,日落何悲?我聞之曰、『從天而頌,孰與制天而用之?』更安用爲蒼天歌哭,作彼奴爲! 文章革命何疑!且準備擎旗作健兒。要前空千古,下開百世,收他臭腐,還我神奇。爲大中華,造新文學,此業我曹欲讓誰?詩材料,有簇新世界,供我驅馳。

[更に春を傷まず／更に秋を悲しまず／此を以て詩に誓う／花、開くに任せるも好く／花、飛ぶも好く／月圓なること固より好く／日落ちるを何ぞ悲しまん?／我之を聞きて曰く／『天に従いて頌え／天を制し之を用うると孰與れぞや?』と／更に安くんぞ蒼天の爲に歌哭して／彼の奴と爲るを用いんや!／ 文章革命何ぞ疑わん!／且つ旗を擎り健兒と作る準備す／前は千古に空しく／下は百世に開くを要めん／他の臭腐を收め／我に神奇を還す／大中華の爲／新文學を造り／此の業、我が曹誰に譲らんと欲するや?／詩の材料／簇新の世界に有り／我に驅馳を供す]

これが書かれる少し前から文学に関して友人達との論争が過熱していた。このような時期に書かれた詩である。

ここでは文章革命を掲げ、新文学を作り出す意気込みが述べられている。

さらにこの詩について、『嘗試集』自序では以下のように言及する。

這首詞上半所攻撃的是中國文學『無病而呻』的惡習慣。我是主張樂觀,主張進取的人,故極力攻撃這種卑弱的根性。下半首是去國集的尾聲,是嘗試集的先聲。

[この詞の前半部で攻撃しているのは中国文学の『無病にして呻ず』の悪しき習慣である。私は樂觀を主張し、進歩を主張する人間であり、だからこのような柔弱な本性を懸命に攻撃するのである。後半部分は「去國集」の結尾であり、「嘗試集」の先触れである。]

この〈沁園春 誓詩〉は「去國集」最後の作品であると同時に、「嘗試集」の先触れでもあった。古典詩から新詩への、その分岐点が文学革命を行うことであった。そしてこれはよほど推敲を重ねたようで、『筭記』には合計五種の〈沁園春〉があるが、第五回目の改稿の付記に、

此詞修改最多、前後約有十次。但後來回頭看看、還是原稿最好、所以《嘗試集》裏用的是最初的原稿。

[この詞の修正は最も多く、前後約十回になる。しかし後になって振り返って考えると、やはり元々の原稿が最も好かった、だから『嘗試集』に収録したのは最初原稿である。]

十回も改稿を行ったとある。それ程にこの作品に思い入れがあったのであろうか。何れにせよこの直後から論争が始まり、白話文学を推進していくのである。

これ以後友人の任叔永、梅観莊との間で文学革命について激しいやり取りが交わされる。そして詩も書かれるが、これ以後の詩は主に白話詩となる。例えば、1916年7月22日〈答梅観莊一白話詩〉、1916年8月23日〈窗上有所見口占〉(後の「嘗試集」〈胡蝶〉)など、論争の対象となったものや、「嘗試集」に収録されたものがある。しかし「去國集」は文言で書かれた詩詞であり、白話詩に至るまでの思想の変化を伝えるものであるから、1916年4月の作品で幕を閉じているのである。

以上、「去國集」の作品を見てきた。しかし触れていない作品が数種ある。その中の2首について述べる。それは〈秋柳〉〈相思〉である。この二首は短い詩で内容も特別優れたものではない。形式の面では〈相思〉が4つに段落分けしているくらいであるが、1916年の作品であり、もはや実験的な意味は薄い。では何故この詩を胡適が「去國集」に収録したのか。それはこの二つの詩は誰に向けて書かれたものかが重要になる。

#### j. 〈秋柳〉〈相思〉

今までみてきた詩詞は、風景、生活習慣、訳詩・訳詞、送別の詩詞等における実験であったが、この二首は「去國集」では異彩を放つ詩である。何故ならこの詩はアメリカでの胡適の恋人クリフォード・ウィリアムに関係する詩だからである。

まずこのクリフォード・ウィリアムについて少し説明しておこう。クリフォード・ウィリアムは1885年にイサカで生まれた。祖父は実業家として名を馳せ、コーネル大学設立に尽力し、父は同大学の教授であった。胡適と出会った頃はダダイズムに傾倒し始めた時期であり、このことが胡

適にも少なからず影響したようである<sup>(12)</sup>。

『筭記』に初めて出てくるのは、1914年10月20日〈違蓮司女子之狂狷〉である。二人で三時間余散策を楽しんだことが書かれてある。このことを皮切りに二人の間の往来が、留学時代は勿論、胡適の帰国後までも続くのである。

その交際相手に贈った詩の一つが〈秋柳〉である。これは「去國集」では、最初に詩があり、その後に序がある。その詩は

但見蕭颯萬木摧，尚餘垂柳拂人來。西風莫笑柔條弱，也向西風舞一回。

[但だ見る、蕭颯として萬木摧け／尚餘る垂柳、人來たるを拂う／西風、柔條の弱たるを笑う莫かれ／また西風に向かい、一回舞う。]

多くの木々が枯れゆく中、弱々しい秋の柳だけが西風に舞っていることを詠んでいるのである。そしてこの後に原序が付記されている。

此七年前(己酉)舊作也。原序曰：

秋日適野，見萬木皆有衰意，而柳以弱質，際茲高秋，獨能迎風而舞，意態自如。豈老子所謂能以弱存者耶。感而賦之。

[これは七年前(1909年 筆者注)の旧作である。原序にこう言う：

秋日、野に適き／萬木皆衰意有るを見／柳、弱質を以て／茲の高秋に際い／獨り能く風を迎えて舞い、意態自如たり／豈に老子の所謂能く弱を以て存する者や／感じて之を賦す。]

元々は1909年に作られたものだとかこれからわかる。内容も柳という弱々しい木が、秋が深まった頃でも、以前のように一人風に舞っているのに感じて読んだとある。

そしてこの後1916年7月の日付が入った新たな長い追記を加えている。そこで、「以爲庚戌以前所作詩詞，一一都宜刪棄，獨此二十八字，或不無可存之價值。遂爲改易數字，附寫於此」と、この詩の存在価値を認めている。

では、この“少し字を改めた”とは、何を改めたのか。また何故そのまま収録しなかったのか、その答えが、『筭記』の1914年11月13日の〈秋柳〉から読み取れる。

胡適はクリフォード・ウィリアムから数枚の写真をもらった。それは比類なき素晴らしいものだったとある。この被写体が柳であった。なぜ柳

の写真を送って来たかという、クリフォード・ウィリアムはニューヨークに旅立つからであった。彼女は胡適から中国古代の「折柳贈別」の習慣を聞かされていたから、そうしたのである。そして序があり、

戊申在上海時、秋日適野、見萬木皆有衰意、獨垂柳迎風而舞、意態自如、念此豈老氏所謂能以弱存者乎？因賦二十八字云

[戊申(1908年 筆者注)上海に在り／秋日、野に適き／萬木皆衰意有るを見／獨り垂柳風を迎え舞い／意態自如たり／念うに此れ豈に老氏の所謂能く弱を以て存する者や？／因りて二十八字を賦して云う。]

先ほど見た原序とほとんど同じである。そして、

已見蕭颺萬木摧、尚餘垂柳拂人來。憑君漫說柔條弱、也向西風舞一回

[已見る、蕭颺として萬木摧け／尚餘る垂柳、人來たるを拂う／君に憑りて漫りに柔條の弱を説き／また西風に向かい、一回舞う。]

“少し字を改めた”箇所は第三句目である。三句目以後はクリフォード・ウィリアムに語りかけている体裁である。何故このようなことを胡適はクリフォード・ウィリアムにいったのか。これは『筭記』の追記で、

女士謂余曰：「日本之犯中國之中立也、中國政府不之抗拒、自外人觀之、似失國體。然果令中國政府以兵力拒之、如比利時所爲、其得失損益雖不可逆料、然較之不抗拒之所損失、當更大千百倍、則可斷言也」、余因以訥博士之語（見本卷第一五則）告之、並告以吾「秋柳」之詩、女士亦以爲此中大有真理。

[女史私にこのように言った：「日本が中国の中立を犯し、中国政府がこれに抵抗しない、外国人としてこれを見ると、すでに国の威信を失っているようである。しかし中国政府をして武力でこれを拒否することは、ベルギーのおこなったことのように、その得失損益は予測できないが、これを拒否しない場合の損失と比較すれば、当然百倍、千倍になり、これは断言できる」、私は博士の意見を受容し（本巻第十五則を見よ）彼女に伝え、私の〈秋柳〉の詩を伝え、女史はまたこの中の大いなる心理を思った。]

当時日本から攻撃をされていた中国の行動を述べた箇所である。留学生の間でも日本にたいして猛烈な抗議行動があったが、その中で胡適は

抗議などはせず、学生はじっくり学習すべきとあって、中国人留学生から猛反発を食らったことがある。そのことを語ると同時に胡適はクリフォード・ウィリアムに〈秋柳〉を送ったのだ。

「去國集」ではクリフォード・ウィリアムの名前は出てこないが、このような経緯がある以上、この詩にはクリフォード・ウィリアムへの思いもあると考えていだろう<sup>(13)</sup>。

次に〈相思〉を見ていく。「去國集」では、作成時期の記載はないが、『筭記』では1915年10月13日に同題である。「去國集」〈相思〉では、

自我與子別、於今十日耳。奈何十日間、兩夜夢及子？

前夜夢書來、謂無再見時。老母日就衰、未可遠別離。

昨夢君歸來、歡喜臨江坐。語我故鄉事、故人頗思我。

吾乃無情人、未知愛何似。古人說「相思」、無乃頗類此？

[我、子と別れてより／今に於いて十日のみ／十日間を奈何せん／兩夜、夢子に及ぶ？前夜夢に書來りて／謂う、再見の時無しと。／老母日に衰と就り／未だ遠く別離す可からず／昨夢、君歸り來りて／歡喜し、江に臨みて坐す／我に故郷の事を語り／故人、頗る我を思う／吾乃ち無情の人／未だ愛何に似るかを知らず／古人「相思」を説き／乃ち頗る此に類るなしや？]

胡適がある人と離れ離れになっている様子を切々と詠っている珍しい詩である。この頃胡適はイサカのイエール大学からニューヨークのコーロンビア大学に移ってきたばかりであった。そしてクリフォード・ウィリアムはニューヨークに居たらしいが、胡適と入れ替わるようにイサカに戻ったのである。

そのクリフォード・ウィリアムとの別れを惜しんだ詩であり、哀傷の思いを直接的に述べている。しかし「去國集」、『筭記』ともに序など説明など一切なく、詩だけがあるのみで、読者にはこの詩の真意はわかるはずもなかった。

この二首は他の詩が何らかの実験や思想の進歩の過程を表しているのにたいし、そのような意味合いは持っていない。これらは胡適の留学時代の個人的な思い出の一つとして収録していただけないか。



## 結論

以上『嘗試集』の付録である「去國集」の一部を見てきた。「去國集」の作品はアメリカ留学中、それも1916年以前の文言の詩詞であるが、単なる古典詩、古典詞であったわけではない。「去國集」は、古典詩から新詩への実験場であった。

その作品の実験内容は、①題材の多様化(〈耶蘇誕節歌〉〈大雪放歌〉)、②転韻体(〈久雪後大風寒甚作歌〉〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉〈老樹行〉〈送梅觀莊往哈佛大學〉)、③「写真」「真」「達意」(〈哀希臘歌 The Isles of Greece〉〈游影飛兒瀑泉山作〉〈自殺篇〉)、④段落分け(〈自殺篇〉〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉〈沁園春〉)、⑤詩界革命(〈臨江仙〉)、⑥外国語の使用、文学革命(〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別〉〈沁園春〉〈送梅觀莊往哈佛大學〉〈沁園春 誓詩〉)、⑦胡適之体(〈老樹行〉)の七つが挙げられる。

そして胡適のアメリカ留学時代の思い出を綴った詩である〈秋柳〉〈相思〉がある。しかしこの論文では〈滿庭芳〉〈秋聲〉の「去國集」における意味はよくわからなかった。今後の課題としたい。

その後の留学時代のことは『逼上梁山—文學革命的開始』に詳しく記載されている。あたかもアメリカ留学時代の前半部分を「去國集」で、後半部分を『逼上梁山』で表しているようである。

また初版で掲載された〈去國行 二章〉〈翠樓吟〉〈水龍吟・綺色佳秋暮〉〈游影飛兒瀑泉山作〉〈送許肇南先甲歸國〉〈墓門行〉〈水調歌頭 今別離 有序〉の7作品が四版では削られた理由も確実なことはいえないが、前述したように、一つとして、1922年になると白話詩の勢力が徐々に大きくなり、これらの実験的な要素に乏しい詩の存在価値がなくなってしまったこと。二つ目には、友人たち一任叔永、陳莎菲、魯迅、俞平伯一の助言により、削除したと考えられる。

更にもう一つ大きな問題が残る。この「去國集」は『嘗試集』の付録であり、これを読む人々に胡適自身の文学思想の変遷を示す作品である。しかし「去國集」だけをみているだけでは、中々その思想の進展状況がはっきりわからない。やはり『筭記』と比べて初めてわかるものであろう。ところがこの『筭記』が出版されたのは1939年である。当然『嘗試集』が出版

された頃には『筭記』は存在しない。

そもそも『筭記』は留学中の日記なのだが、『筭記』巻三の初めに以下のような文章がある。

吾作日記數年,今不幸中輟,已無可復補;今以筭記代之:有事則記,有所感則記,有所著述亦記之,讀書有所得亦記之,有所遊觀亦略述之。自傳則吾豈敢,亦以備他日昆弟朋友省覽焉耳。

[私は日記を数年書いていたが、不幸にも中断してしまった、今筭記をこれの代わりとし、事あればそれを記し、感じるものがあればそれを記し、著述することがあれば、またそれを記し、書物を読み、得ることがあれば、またこれを記し、遊覧すれば、またこれを慨述する。自伝を私がどうして敢えて書こうか。後日これを、兄弟、友人が読むことに備えるだけである。]

後日、友人らに見てもらうことを前提に『筭記』を書いているのである。実際1915年2月11日〈詩貴有真〉には、

張子高(準)索觀筭記。閱後寄長書,頗多過譽之詞。

[張子高(準)が筭記を読んだ。読んだ後、長い手紙を寄せて、それには多くの過分の賞賛の言葉があった。]

実際に張準が『筭記』を見て、胡適に賞賛の手紙を送っている。留学中に胡適は『筭記』『嘗試集』『去國集』を友人に見せており、帰国後も『嘗試集』を錢玄同に見せていたように、『筭記』も帰国後新たにできた友人達に見せていたことは十分に考えられる。となれば事前にこの『筭記』を見た人間により焦点を当てて「去國集」を示すことにより、胡適自身が如何に文言から白話に移行したか、その発展の様子を如実に友人達に語ることができたのではないであろうか。

『嘗試集』は、白話詩の成果である「嘗試集」、文言詩詞から白話詩詞への発展段階の作品集である「去國集」から成り、「嘗試集」はこれから白話詩を書こうとする若者に向けられ、「去國集」は、すでに古典の教養を身につけた人間に向けられた作品集であったと言えよう。

〈注〉

- (1)『蕨暉室筭記』1939年、上海亜東図書館から出版。後1947年商務院書館から『胡適留學日記』と改称されて出版された。
- (2)『筭記』1911年9月8日に「寫去國後之詩詞爲『天半集』」と有る。これが最初の詩集の記述であるが、これ以後は出てこない。
- (3)1918年、『新青年』第四卷二号に「嘗試集序」と題して発表された。
- (4)『嘗試集』は、初版は1920年3月、再版は1920年9月、四版は1922年10月にそれぞれ亜東図書館から出版されたが、第三版は未見。しかし『胡適全集』第10巻(李羨林主編、安徽教育出版社、2003.9)「整理説明」で「1921年的“三版”与“二版”相同」とあり、出版されている。
- (5)初版の「去國集」と再版の「去國集」の異同箇所はない。
- (6)〈江上〉は初版『嘗試集』第一編、〈礼〉は四版『嘗試集』第三編にあり、削除されていない。
- (7)『胡適文集9』(歐陽哲生編、北京大学出版社、1998年11月)に依れば、「去國集」の作品の多くは、『留美学生季報』(最初の雑誌名は『留美学生年報』(以下『留美年報』と略称)、1914年3月に『留美学生季報』と改称。(以下『留美季報』と略称))に発表されている。以下に掲載時期を挙げる。
  - (1)〈去國行〉1913年1月、『留美年報』第二年本。
  - (2)〈翠樓吟〉1914年1月、『留美年報』第三年本。
  - (3)〈水龍吟・綺色佳秋暮〉1914年1月、『留美年報』第三年本。
  - (4)〈耶蘇誕節歌〉1914年1月、『留美年報』第三年本。
  - (5)〈大雪放歌〉1914年3月、『留美季報』春期第1号。
  - (6)〈久雪後大風寒甚作歌〉1914年1月、『留美年報』第三年本。
  - (7)〈游影飛兒瀑泉山作〉1915年6月、『留美季報』夏期第2号。
  - (8)〈自殺篇〉1914年9月、『留美季報』秋期第3号。
  - (9)〈送許肇南先甲歸國〉1915年6月、『留美季報』夏期第2号。
  - (10)〈墓門行〉1915年6月、『留美季報』夏期第2号。
  - (11)〈滿庭芳〉1915年9月、『留美季報』秋期第3号。
  - (12)〈水調歌頭 今別離 有序〉1917年3月、『留美季報』春期第1号。
  - (13)〈臨江仙〉1917年9月、『留美季報』秋期第3号。
  - (14)〈將去綺色佳、叔永以詩贈別。作此奉和。即以留別。〉1917年9月、『留美季報』秋期第3号。
  - (15)〈沁園春 誓詩〉1917年3月、『留美季報』春期第1号。

以上、15作品が発表されているが、筆者は『留美年報』『留美季報』の全巻は未見。ただ『留美季報』民国三年三月第一年春期のみ手に入り、その中では

「去國集」の〈大雪放歌〉が、任叔永の「歲暮雜詠四首」の後に「大雪」と題を変え、収録されている。序文、詩ともに異同が見られるので、以下に挙げる。

大雪 有序

胡適

民國三年元旦後一日任叔永有歲暮雜詠之作余謂叔永每成四詩當以一詩奉和明日叔永果以五古四章來索和其詩皆老練雅潔非余所能望其肩背以有宿諾不容食言因追敘歲暮大雪景物作七古一章淺陋何足言詩惟去國日久國學荒落偶有所吟咏但押韻脚輒復自喜不忍焚棄豈所謂空谷不聞足音見似人而喜者耶

往歲初冬雪載塗。今年聖誕始大雪。天工有意弄奇詭。積久迸發勢益烈。夜深飛屑始叩窗。侵曉積絮可及膝。出門四顧喜欲舞。山與天接不可別。疏林小市迷遠近。瓊瑤十里供大閱。眼前諸松耐寒歲。虬枝雪壓垂欲折。窺人松廼寒可憐。覓食凍雀蹟亦絕。毳衣老農朝入市。令令瘦馬駕長轡。道逢相識遙告語。明年麥子未應劣。路旁謹呼小兒女。冰槩鐵屐手提挈。昨夜零下二十度。湖水凍合堅可滑。客子踏雪來復去。朔風齧膚手皸裂。歸來烹茶還賦詩。短歌大笑忘日昃。開窗相看兩不厭。清寒已足消內熱。百憂一時且棄置。吾輩不可負此日。

- (8) 1914年5月31日〈山谷之三句軋韻體詩〉では、黃庭堅の「觀伯時畫馬」、1915年2月11日〈三句軋韻體〉では、元結の「中興頌」、蘇軾の「次韻和山谷畫馬試院中作」を三句軋韻体の例として挙げている。
- (9) 梁啓超「新中国未來記」第四回「旅順鳴琴名士合併 榆關題壁美人遠游」に第一節と第三節の原文と訳がある。蘇曼殊は、1908年の「文学因縁」の中にバイロンの訳詩があり、馬君武は1905年『新文学』に訳詩があるようだが、両者とも未見。
- (10) 光緒二十七年(1901年)十月二十一日、『清議報』第九十九冊、「飲氷室自由書」に〈煙士披里純(INSPIRATION)〉がある。
- (11) 文学に関しての議論が本格的に始まったのは、1916年の初頭からである。『逼上梁山—文学革命的開始』第三章、『蔵暉室筭記』1916年2月3日〈與梅觀莊論文學改良〉に詳しい。〈與梅觀莊論文學改良〉では「與觀莊書，論前所論〈詩界革命何自始，要須作詩如作文〉之意。略謂今日文學大病，在於徒有形式而無精神，徒有文而無質，徒有鏗鏘之韻貌似之辭而已。今欲救此文勝之弊，宜從三事入手：第一，須言之有物；第二，須講文法；第三，當用文之文字（觀莊書來用此語，謂Prose diction也）。時不可避之。三者皆以質救文勝之敝也」、とあり、文の文字を詩に用いるかどうかが論争の発火点となった。
- (12) クリフォード・ウィリアムについては、藤井省三氏「恋する胡適—アメリカ

留学と中国近代化論の形成一」(『岩波講座現代思想2 20世紀知識社会の構図』1994年8月29日所収)を参照されたい。

- (13)「秋柳」は『胡適口述自伝』第四章「青年期的政治訓練」の《対世界主義、和平主義和國際主義的信仰》で「老子對我幼年的思想影響很深。記得我在一九〇九年(清宣統元年,己酉)作了一首詠〈秋柳〉的詩。這是一首絕句,在這詩前的小序上,我寫道:〈秋日適野,見萬木皆有衰意,而柳以弱質,際茲高秋,獨能迎風而舞,意態自如。豈老氏所謂能以弱者存耶?感而賦之。〉」、『四述自述』「在上海(二)」にも「秋柳 有序(己酉)、秋日適野,見萬木皆有衰意,而柳以弱質,際茲高秋,獨能迎風而舞,意態自如。豈老氏所謂能以弱者存耶?感而賦之。但見蕭颼萬木摧,尚餘垂柳拂人來。西風莫笑長條弱,也向西風舞一回。(西風莫笑,原作「憑君漫說」,民國五年改。長條原作「柔條」,十八年改。)」と、それぞれ言及箇所がある。

〈参考文献〉

『嘗試集』胡適著、亜東図書館、初版・1920年3月、再版・1920年9月、四版・1922年10月。

『胡適留学日記』胡適著、商務印書館、中華民國三十六年十一月本館第一版。

『胡適全集』李義林主編、安徽教育出版社、2003年9月。

『胡適文集』歐陽哲生編、北京大学出版社、1998年11月。

『胡適之先生年譜長編初稿』胡頌平編著、聯經出版事業公司、民國73年。

『胡適与韋蓮司』朱洪著、湖北人民出版社、2003年9月。

「胡適の白話詩〈胡蝶〉—〈嘗試集〉論に先だって—(前編)」牧戸和宏、『帝塚山大学論集』第9号、1975年3月。

「胡適の白話詩〈胡蝶〉—〈嘗試集〉論に先だって—(後編)」牧戸和宏、『帝塚山大学論集』第14号、1977年4月。

「留米時代の胡適の白話詩」牧戸和宏、『帝塚山大学論集』第15号、1977年5月。